

「民俗藝術」の発見

——小寺融吉の学問とその意義——

鈴木正崇

はじめに

日本の祭祀芸能の研究において、民俗芸能の概念は現在では一般的に広く使用されている。しかし、民俗芸能の概念がどのような過程を通して形成され、どのような影響を日本の各地に及ぼしたかを考察することは重要な課題である〔橋本 二〇〇六〕。現在では自明の民俗芸能の概念は、戦後の一九五〇年頃に初めて使用され一九六〇年代に一般化した。初期には民間の舞踊に包括されていたが、試行錯誤を経て独特の概念となって現在に至る。この分野の初期の研究者が小寺融吉（一八九五～一九四五）であることは間違いない。小寺融吉は「型」や「わざ」や美意識を重視した舞踊の研究を展開した。一九二五年（大正一四）に日本青年館の開館記念行事として、小寺融吉が舞台監督を務めた「郷土舞踊と民謡の會」は大きな転機で、その後も継続

し、戦後には全国民俗芸能大会として発展して、祭祀芸能の舞台化の流れを定着させることになった。ただし、小寺融吉に関しての研究は少なく、評価についても揺れがあり、本稿は試論的考察である。

1、小寺融吉とその周辺

小寺融吉は一八九五年（明治二八）に北海道小樽市で岐阜士族の小寺芳次郎の四男として生まれた。兄弟には学者や芸術家が多く、二男の小寺健吉は洋画家、三男の小寺廉吉は富山大学教授や桃山学院大学教授を務めた地理学者である。五男の小寺駿吉は千葉大学教授を務め、造園学や風景学の専門であった。七男の中村伸郎は新派の俳優で、青年期には画家を志したが断念して舞台俳優となり、築地座を経て、一九三七年に杉村春子らと共に劇団文学座を創立し、中核メンバーとして活躍した。⁽²⁾

小寺兄弟には民俗に関心を持つものが輩出し、特に小寺廉吉は経済地理の専門で、朝日新聞社に勤務した時に柳田國男と面識を持ち、柳田邸の研究会にも出席している。⁽³⁾一九三四年に柳田國男が組織した「郷土生活研究所」の同人となつて山村調査に加わつた。一九二八年に、『ひだびと』に発表した「奥能登の『田の神行事』」(一、二)は後にアエノコトとして知られる農耕儀礼の初めての報告である。「小寺廉吉 一九二八」。墮胎・間引き研究の先駆者でもあり、大井川下流域で調査を行っている「小寺廉吉 一九四〇」。砺波地方の民家、瀬戸内海の豊島、志摩の海女の村、越中五箇山、満州移民など幅広い調査を展開し、小寺融吉との協力関係を持続した。

小寺融吉は東京開成中学校(現・開成高等学校)卒業後、早稲田大学文学部英文科に入学し、坪内逍遙(一八五九～一九三五)に演劇学を学んで一九一八年に卒業した。研究の中核は西欧の演劇理論と美学で、日本舞踊や歌舞伎の研究者として知られているが、同時に民間の舞踊や演劇にも大きな関心を寄せた。その主軸は坪内逍遙の演劇論の日本の展開としての舞踊研究であつた。「舞踊」という用語は坪内逍遙が『新楽劇論』(一九〇四)で、英語の dance の翻訳として使用して以来、急速に定着し、小寺も坪内から多くを学んだ。そして、研究だけでなく、実践面において、

外国の舞踊と比較しながら日本舞踊の新たな振付けを考案して「新舞踊」への道筋をつけた「江川 二〇〇六・一三三」。「新舞踊」とは一九一九年に香取仙之助によつて提唱された日本舞踊の新たな試みをいう。実践面では各地に伝わる舞踊や演劇の調査と文献収集と紹介や舞台化を試みた。

小寺融吉は音楽劇の製作・上演に積極的に関わり、一九二二年(大正一一)六月に雑誌『解放』に音楽劇「真奈の手児奈」を発表し、七月には帝国劇場で初演された。この話は古代に遡る。下総国葛飾の真間に住んでいた美人の手児奈が近隣の国に嫁いだが、葛飾との間に争いが起こり帰国した。しかし、実家には戻れず子育てに専念する。その後、手児奈をめぐる争いが起こり、世を憐んで入水したと伝える。古くからの伝説を近代風に振付けしたのである。小寺の戯曲には修験道の開祖とされる役行者を題材にした「葛城の岩橋」、大和の仙人だが俗っぽさを見せる「久米の仙人」があり、民間伝説を基盤にした伝説劇、児童劇、舞踊劇が多い。⁽⁵⁾一九二二年には自作「お竹大日如来」を東京の増上寺で野外劇として試演した。この内容は靈験譚で以下の通りである「牛島編 一九九二」。

元和寛永の頃に江戸の佐久間某の家に竹という下女がいて、信心深く従順で、五穀を大切に扱い、自分の食事を減らして飢えに苦しむ者に与えた。その頃、武

蔵国比企郡に乗蓮という聖がいて生身の大日如来を拝みたいと願って出羽三山に何年も通った。登拝に際しては羽黒山麓の手向（とうげ）の玄良坊という宿坊に泊った。あの年のこと、宿坊で不思議な夢を見た。「お前が私の姿を見たいならば、江戸に上って、佐久間某家の竹という者を拜め」と。乗蓮は大日如来の託宣と歓喜して宿坊の主人の玄良坊宣安と共に江戸に上り、佐久間家を探し出して竹を礼拝した。すると、竹の全身から光明が発せられた。二人は竹を何度も礼拝し感激して帰った。翌日から、竹は部屋に籠って念仏に専心し、寛永一五年三月二日に亡くなった。竹の死後、家の主は等身の像を彫刻して持仏堂に納めて毎日供養した。寛文六年（一六六六）に、佐久間勘解由家（かげゆ）が施主となり、羽黒の手向の黄金堂境内にお竹大日堂を建立し、像を安置し管理を玄良坊に委ねた。

羽黒修験は江戸時代にお竹大日の出開帳を四回おこない、併せて略縁起や竹の遺品が公開された。お竹の話は江戸の民衆の心を掴み、縁起を素材とした芝居、講釈、錦絵、小説などが生み出された。歌舞伎の台本作家、河竹黙阿弥は、元治元年（一八六四）『双蝶（ふたちょう）色成曙（いろなりあけ）』を初演し、その中に「孝女於竹」の場を仕組んだ。明治維新後、一八八三（明治一六年）にはこの場面を独立させて『身光（みりのひかり）於竹（おたけの）』

として上演した。お竹の話は修身の教育で活用され、孝女の典型とされた。内容は靈験譚であり、前近代の演劇が歌舞伎を経て、どのように近代的な劇に構成されたかわかる「渡辺 一九九七」。小寺融吉の「お竹大日」は黙阿弥を踏まえながらも、坪内逍遙の指導を得て近代風の演出を加えて上演された。坪内逍遙は近代演劇を目指したが、弟子の小寺融吉には古い題材を近代演劇に再生する試みを行った。その目標は、西洋の演劇を歌舞伎と合体させ、題材を民間伝承にとつて日本独自の演劇を作ることにあった。

2、小寺融吉の著作活動

小寺融吉の著作は単著だけでも一五冊に上る。最初の著作は一九二二年（大正一一）に出版した『近代舞踊史論』である。この本の反響は大きかった。師の坪内逍遙は序文で「小寺融吉の此著は、私に取つては、一つの驚異でもあり、一つの喜悦でもある」と賛辞をおくっている。「小寺 一九二二」。後世になるが、本書に関する評価は永田衡吉（一八九三～一九九〇）が評伝の中で的確に伝えている。永田は小寺融吉の長年にわたる友人で、人形芝居や民俗芸能や演劇の報告や考察を行った。一九一七年に早稲田大学を卒業し、小寺の一期上の先輩である。永田は「彼は西歐の学問を以て、わが郷土芸能に立ち向かっている。近代舞

踊史論の素材の分類と解明の方法は、西欧の学問に示唆されたものである。彼が最も刺激を受けたのはハブマイアの『未開民族の演劇』と、フレイザーの『ゴールデンバウ』

であることは、一読してわかるであろう。もし当代の賢者が小寺の浅学を嗤笑するならば、賢者は逆に嗤笑されるであろう。なぜならば、大正十一年、この『近代舞踊史論』公刊以前に、西欧学のメスをにぎって、郷土芸能を解剖台の上に置いた学徒が居ただろうか。『野山の果てに、人知れず咲いて散る月見草のような郷土芸能を博搜して、学問の体系を与えようとした学者が一人でも存在したか。その意味において、小寺をこの学問の先駆者と言うにはばからないであろう。』〔永田 一九八二・一六八―一六九〕という。〔それまで郷土舞踊（いまの民俗芸能）は好事家の猟奇の対象か、一部学者の文献による研究にすぎなかったが、小寺は本書によって実証的にその相貌と性格を明らかにし、初めてわが演劇舞踊史の重要な一環として取りあげた。殊に歌舞伎舞踊との関連性を指摘したこと、雑揉・混迷と見なされていた郷土舞踊に、一貫した学問的体系を与えようとしたことは特筆されてよい。〕「彼の研究態度は欧米の演劇学に則したものである。特に未開民族の芸能に関する分析法を援用して、わが田楽・神楽その他の呪術行事を、芸能発生の根元的な契機として追求したことは、彼の先駆性を

物語るとともに、不変の研究態度を示唆するものと言えよう。』〔永田 一九八二・一八一〕。

永田衡吉によれば、当時の小寺融吉には民族学（ethnology。後の文化人類学）の影響が色濃くあり、柳田國男や折口信夫が共通に参照していたフレイザーの『金枝編』を読んでいた。いわゆる初期の民俗学者と同様に西欧の進化主義の学説を積極的に取り込んだのである。そして、当時は価値が低いとして顧みられなかった郷土舞踊（郷土芸能）を学問の枠組みに取り込み学術的に体系的に研究した。その方法はフレイザーの示唆を受けた呪術から芸能へという流れの中に神楽や田楽を位置づける試みで、普遍的な人類の演劇舞踊史の中に組み込む壮大な試みであった。論旨の一貫性は芸能の型や所作の技法に着目することでもたらされ、究極的には美的要素の抽出や美を生み出す根源にあるものは何かを探求することになった。演劇や舞踊の発生に強い関心を寄せたのである。その中核には歌舞伎舞踊の研究に基づいて発見した「わざ」という身体技法への着目があり、それを応用して「新しい舞踊」を生み出す素材を見出そうとする演出家としての眼もあつた。

小寺融吉の第二作目の著作、『舞踊の美学的研究』（一九二八）では外国の舞踊研究を広く参照し、「プラトーは、舞踊とは、手真似で語る藝術であると云ったという。アリ

ストテレースは、舞踊とは姿の美しさと、律動的な運動とに依って、動作と性格とを模倣するものと云ったという」〔小寺 一九二八・二〇〕として、舞踊の定義はこれに尽きるとさえ言っている。外国の舞踊論を取り込みつつ、日本舞踊を「美学」aestheticsとして考察したことは新たな視点であった。「美学」の概念はウェロン『維氏美学』（中江篤介訳、文部省編輯局、一八八三・一八八四）によって日本に導入され、本書の中で「舞踏」論として展開されている。ただし、明治の美学の推進者たち、森鷗外・高山樗牛・島村抱月などは美学を「舞踏」には展開しなかった〔板谷 一九七八〕という。その点では本書は、美学を舞踊に導入した初期の試みとも言える。目的は舞踊の動きの歴史の変遷を明らかにすることであったが、能・歌舞伎の舞踊の動きを宗教・社会の文脈を考慮せずに行うことは困難であり、舞の動きを美学の観点から藝術として理解することとうまく融合しない。本書はある意味で試論であり、芸態については本田安次、呪術的機能については郡司正勝が引き継いで、早稲田派と呼ばれる民俗芸能を美的観点からみる研究に展開した。

引き続き出版された『藝術としての神楽の研究』（一九二九 a）は「民俗藝術叢書」の一環で、一九二七年（昭和二）に発足した「民俗藝術の会」、一九二八年に創刊した

『民俗藝術』を受けて、郷土芸能、特に神楽を「民俗藝術」として把握するという立場で書かれている。本書は戦時期の『郷土舞踊と盆踊』（一九四一）と並ぶ郷土舞踊に関する本格的な研究であるが、中核は「わざ」への着目であった。本書の目的について小寺融吉は「私は古来の神道に関しては、全くの門外漢であるから、神楽の内容に就て記すことは避け、たゞ単に形式の上からのみ、これを研究した」〔小寺 一九二九 a・三〕とある。神楽の内容ではなく形式を研究対象とし、究極には「わざ」の原点にある「心」を探究する方向に向かった。その点では民間の「心意伝承」を究極の探究目標とした柳田國男と繋がっていた。⁽⁷⁾小寺の研究の出発点は歌舞伎踊りで、要返し、おすべり、首振りなどの身体技法、まさしく「わざ」の探究にあった。しかし、「わざ」の原点は地方の村落の民衆が伝承し維持してきた郷土舞踊にあると考えて、全国各地を歩き、「わざ」と「心」に注目して、神楽や盆踊などに民衆の「芸能美」を発見していくことになる〔三隅 一九八九〕。その点では柳宗悦（一八八九～一九六二）が日本各地の手仕事を調査・蒐集する中で、モノの美にこだわり、「民藝」として発見したことと対比させて考えることも出来る。「民藝」の用語が初めて使用されたのは一九二五年（大正一四）で同時期の出来事であった。そして、一九二五年は雑誌『民族』

の創刊号が刊行された年でもあった。『民族』（一九二五—一九二九）には、南方熊楠・柳田國男・折口信夫・宇野圓空・赤松智城など錚々たる民族学・民俗学・宗教学・社会学・考古学・宗教学の学者が執筆した。編集委員は石田幹之助、田辺寿利、有賀喜左衛門、奥平武彦、岡正雄で、外部からの執筆者は浜田耕作、鳥居龍藏、白鳥庫吉、喜田貞吉、山田孝雄、新村出、東條操、清野謙次、松村瞭、ニコライ・ネフスキーなどで、実質的な担い手は折口信夫、伊波普猷、金田一京助、中山太郎、早川孝太郎であり、宇野圓空、秋葉隆、松本信廣も寄稿するなど、民俗学と民族学の出会いの場となっていた。折口の論文「常世及び『まればと』」は柳田國男の反対で一旦却下されたが、『民族』第四卷第二号（一九二九年）に掲載されるなど重要な雑誌であった。「民族学」という用語の初出は創刊号に掲載された岡正雄による翻訳「民族学」ではないかという「金二〇〇八・一一八」。一九二五年は「民藝」「民族学」などの概念が生まれ、それぞれの分野で個性的な研究者が、民衆の文化に関わる学問領域を創成する動きを開始した転換の年であった。

3、小寺融吉の転機

小寺融吉の転機は一九二五年である。同年一〇月の日本

青年館の開館記念事業として「郷土舞踊と民謡の會」の公演が行われ、各地の演者を集めて舞踊と民謡が舞台で演じられた。小寺融吉は舞台監督を務めた。その後、「郷土舞踊と民謡の會」は毎年行われることになり、毎年、審査指導・演出・舞台監督を務め、全国各地の郷土舞踊の紹介と普及、民謡の普及と保存に奔走することになった。各地の郷土舞踊を見て回って「舞台」に乗せるという、現在の「全国民俗芸能大会」への足取りが始まったのである。そして、一九二七年（昭和二）には、柳田國男・折口信夫・永田衡吉などと「民俗藝術の會」を結成して、『民俗藝術』を一九二八年に創刊した（地平社書房刊）。近代舞踊や歌舞伎舞踊とは異なる、民間に伝わる舞踊を「民俗藝術」や「郷土舞踊」として発見し、学問の俎上に載せた意義は大きい。『民俗藝術』創刊号の巻頭言は署名はないが柳田國男の執筆による「永田一九八二」。そこには以下のように書かれている。「四百年ばかり前は、江戸は水鳥の群れて舞ふ、蘆原でありました。岡の松樞萩尾花の中を、赤黒色々の野馬が散歩してをりました。時運は方に熟して人煙漸く滋く、技藝は鬱然として其間に起り且つ栄えましたけれども、土地の主が遠近の田舎者であった如く、是にも貴紳上流の趣味はめつたに干渉せず、況んや外国の感化などは殆んど其痕跡を見出さぬのであります。近代のあらゆる

文化事相の中で、是ほど完全に自力一つを以て、晴れやかに成長し展開したものは、他に先づ無いと言つてよらしいのであります。この文章には橋本裕之が、「民俗芸能を、未だ『近代』に規定されていない『古風』かつ『原始的』な身体技術とみなすまなざしが作用しているように思われる」〔橋本 二〇〇六・一一六〕と、指摘したように、民俗芸能（郷土舞踊）を通して「古代」を透視する折口信夫や、民俗芸能に「美」を見出す小寺融吉の「暗黙の前提」があった。ただし、柳田は、「古風」な民俗芸能が近代の新たな刺激の中で急速に「伸び育たう」としている動態的過程にあることを同時に感じ取っており、「目の前の豊富な事実を確実に記録して、それを成るべく多くの者の共有の知識にしたいと思います。さうして其材料の整頓と比較から、自然に明らかになつて来る共通の現象に基づいて、若しあるならば此世の法則といふものを、抽出して見たいと考えて居るのであります」と述べている。ここでは前近代と近代の出会いがもたらす大きな変革に正面から対峙し、「民族誌的現在」を確実に把握することで、社会の動態に迫り法則を導くという重要な視点が含まれていた。しかし、現在にこだわる「考現学」はその後は余り探究されなかつた。

戦前には郷土舞踊・郷土芸能・民俗舞踊・民俗藝術と呼

ばれた分野は、戦後には「民俗芸能」の用語に収斂した。研究機関としては、東京文化財研究所（一九五〇年設立）に一九五二年に芸能部が置かれ（二〇〇六年に無形文化遺産部）、学会は一九八四年（昭和五九）に民俗芸能学会が設立された。しかし、研究内容は記録や報告に若干の考察を加えることが多く、口頭伝承や身体技法の比較による「民俗学的歴史」を構築する傾向が強い。現場での経験と勘に頼る方法論なき研究分野となつた。個別の資料は蓄積されるが、全体は見えなくなつた。研究内容が大きく変化したのは、一九七五年に国の重要無形民俗文化財という制度的枠組みが登場して以降で、民俗芸能が「客体化」「操作」の対象になり、観光化や遺産化、地域おこしと連動して、否応なく変化が考察の中軸になつた。

4、日本青年館と小寺融吉

小寺融吉と民俗舞踊との深い関わりは日本青年館に始まる。財団法人日本青年館は、一九二一年（大正一〇）に、青年団や青年を支援する社会教育関係団体として設立された。これには前史がある。明治天皇の崩御（一九一二年）、昭憲皇太后の崩御（一九一四年）の後、祭神に祀る動きが浮上し、一九一五年（大正四）に内務省の告示で明治神宮の建設が決定された。しかし、建設は第一次世界大戦の影

響をうけて物価や労賃が急騰し、人夫が思うように集まらなかつた。明治神宮造営局総務課長の田澤義鋪たざわよしほ（一八八五—一九四四）は、青年団の労力奉仕を建議し、当初は異議があつたものの、最終的には全国各地の青年団の一三〇〇〇人の奉仕で事業を完成させた。⁽⁸⁾一九二〇年（大正九）一月一日に明治神宮の鎮座祭が行われた。同年一月二一日、内務省と文部両省の主催で全国各都市を単位として一各ずつ代表者を選んで、全国青年団神宮代参者大会が開催された。大会二日目、一月二二日に、皇太子殿下（後の昭和天皇）は、青年団の代表にお言葉を賜い、これに奮い立つた青年団員の間から、大正時代の青年の意気を後世に残す記念物を残す提案がなされ、明治神宮の周辺に青年の修養道場に供する一大殿堂の建設が企画された。⁽⁹⁾そして、一九二一年（大正一〇）九月二日、財団法人日本青年館が設立され、⁽¹⁰⁾一九二五年（大正一四）四月一五日には青年団の全国組織である大日本連合青年団が創立された。全国の青年団の寄付金によって東京青山に日本青年館が完成し、⁽¹¹⁾一九二五年一〇月に開館式が行われた。

日本青年館の開館記念祝賀行事の一つが一九二五年の「郷土舞踊と民謡の會」の公演で、「郷土」に埋没している郷土舞踊や民謡を集めて公開する初めての試みであつた。⁽¹²⁾この時の舞台監督が小寺融吉で既に研究者として広く知ら

れていたのである。企画協力者は柳田國男・折口信夫・北野博美で、郷土舞踊を学術的に位置付け、舞台の上で紹介する試みとなつた。観客にも好評で、出演者も大いに励みになつて自信がついたという。当時の状況について熊谷辰治郎は「郷里を離れて、東京に生活する人々には、郷土色豊かな郷土の舞踊と民謡に、一種の郷愁を感じるのである。そして、期せずして、この催しを、年々続けて欲しいという要望が湧いて来た。顧問の柳田國男先生をはじめ、折口信夫博士なども、この行事を、『東京の年中行事』にしてはという意見を出された」と記している「熊谷 一九二九、一九七九」。現在まで継続する芸能の舞台化の始まりで、その後の全国民俗芸能大会、民俗芸能研究の原点となつた。⁽¹³⁾NHKは出演団体をラジオで紹介して放送するなどメディアの力も加わるようになる。ただし、「全国的に農村の荒廃が進行し、その立て直しを図ることが、青年団においても重要な課題」〔笹原 一九九二・四八〕で、「郷土娯楽の充実」や「芸能の活用」が論議になつていた現地の状況を考慮する必要もある。政府が前代の若者組を解体して青年団に編成し直し、国家の末端の組織に組み替えた政策を、文化の外被を持つて地方にソフトに働きかけたのが日本青年館の活動であつた。大正時代の社会変動は、中央と地方の相互作用を活発化することで、新しい文化運動を

生み出した。その後の展開では、一九二七年（昭和二）の金融恐慌に続く、農村の窮乏化、世情の不安定化に対応して青年団活動の役割が重視され、「郷土舞踊」は青年の善導の手段として重要性を増した。

5、「郷土」と「民謡」

「郷土」という言葉の使用に関しては民俗学の動向を見ていく必要がある。柳田國男は一九二三年の大正大震災時はジュネーブに滞在中であったが、直ちに帰国した。一九二四年から民俗学の論考を積極的に発表し始めて、「郷土」という言葉も織り交ぜていくことになった「室井 二〇〇六・一〇四」。柳田國男の地方への関心は、農政学が専門の時代に既に胚胎していた。明治維新後に生じた農村部から都市部への大量の移住に伴い、一八九〇年代から「故郷」を離れた人々が郷友会（同郷会）を組織し始め、社会問題も生じてきた「成田 一九九八」。柳田國男の郷土に関する研究活動は新渡戸稲造と共に一九一〇年に設立した『郷土会』（一九一八）の時期が一つのピークで、著作の「郷土」の使用頻度は一九一四年が飛びぬけている「室井 二〇〇六・一〇八」。柳田國男は当時の政府の地方改良運動を批判する意図を持ち、『郷土研究』（一九一三～一九一七）を刊行して運動の組織化を試みた。その後、しばらく空白の期間

がある。一九二四年の日本への帰国後は、外国滞在によって日本への視点を相対化して、危機意識を持って日本の将来を構想し、日本の文化をどのように維持するかという自省作用の中で、新たに「郷土」を意識化した。一九三〇年代前半に「郷土」の用語が多用され、『民間伝承論』（一九三四）と並ぶ民俗学方法論の書は『郷土生活の研究法』（一九三五）と題して出版された。まさしく、民俗学の研究対象はこの時期に「郷土」になり、「郷土」という言葉を最も頻繁に使用する研究領域になった。柳田の郷土観は、室井康成の考察によれば、政策課題としての「郷土」から、前近代の生活世界としての「郷土」へ、そして都市文化と対抗する「秩序」を見出しうる場としての「郷土」へと変化してきたという「室井 二〇〇六・一〇一～一〇五」。「郷土」は遅れた否定的な世界から、肯定的に評価される世界に変容して都市文化の中に定着した。「郷土舞踊」の概念は小寺融吉の造語かもしれないが、「郷土」という言葉の使用については時代的背景としての学問研究の潮流があった。「郷土」はネットワーキ化され日本の文化ナショナルリズムの基盤となっていた。

「民謡」も「郷土」と共にこの時代に「発見」された。一九二〇年代後半から一九三〇年代前半にかけて「民謡」の概念は、古き共同性と「近代」との結節点において見出

され一般化されたのだという「武田 二〇〇一四」。「民謡」は人々の記憶を呼び覚まし、「郷土」を想起させる媒体となつて機能した。メディアや文化産業、そして知識人がその担い手となる。小寺融吉が担当した「郷土舞踊と民謡の會」は、「郷土」と「民謡」に舞踊を介在させて結合する役割を果たし、日本の文化ナショナリズムを構築する運動に関与したのである。ベネディクト・アンダーソン「アンダーソン 一九八七」のいう「想像の共同体」imagined communitiesとしてのネーションは、文化的な基盤を得て強化されたと言える。「民謡」が各地で発見され、創作され、レコードやラジオなどのメディアや、観光産業や地域振興を通じて広まった。「郷土舞踊と民謡の會」が始まる前年の一九二四年には大衆向け旅行雑誌「旅」が創刊され、国鉄、私鉄、鉄道省が観光事業に取り組み、市町村レベルでも観光部署が設置された「白幡 一九九六・三八～五八」。観光化によって文化産業が生成され、鉄道網の整備に伴つて、大衆消費社会が成立しつゝあつた。歌謡や観光に関わる資本主義は、「民謡」と「郷土」の結合を基盤に更に展開していくことになつた。

「郷土舞踊と民謡の會」は戦争のために一九三六年（昭和一一）で中止となつた。小寺融吉は最後まで審査指導・演出を担当した。この企画には日本の近代化と共に「衰退

し消滅していくとされた芸能」の継承と保存に主体的に関わるという使命感が横溢していた。ノスタルジックな「消滅の語り」である。この傾向は戦後になって再開して以降も底流となつて残り続けた。戦後の動きは、一九四七年（昭和二二）に青年たちが戦後復興を祈念して「郷土芸能大会」を開催した。一九五〇年（昭和二五）からは本田安次が中心となり、「全国郷土芸能大会」と改称し文部省主催の芸術祭の執行公演として再出発し（日本青年館は第二回から）、一九五八年まで続いた。一九五九年から「全国民俗芸能大会」と改称され、現在に至っている。現在の主催は、財団法人日本青年館・全国民俗芸能保存振興市町村連盟で、二〇一四年（平成二六）で第百四回を数えた。二〇一五年は日本青年館建て替えのため休止となつた。日本青年館の立場からこれまでの活動を集約すると以下のようなになる。「戦前・戦後を通じて、七〇余年間一貫して日本の地域で行われている生活としての芸能をそのまま舞台で演じてもらうことを本旨とし、四五〇余の芸能を紹介してきた。又、これら芸能の記録保存に本大会はいち早く取り組んできた。」（日本青年館HP）。確かに、「全国民俗芸能大会」は民俗芸能の推進・保護・保存・記録に大きな役割をはたしてきた。しかし、笹原亮二が指摘したように「笹原 一九九三」、この大会は「奇妙な舞台」であり、演出が加わっ

た「見せる舞台芸能」である。既に「民俗舞踊と民謡の會」において演者と観客が分化して、民俗芸能を支えて来た民間信仰が脱落し、芸能主体の見世物になる傾向があった。小寺融吉も歌に合わせて新しい踊りが創作されたり、太鼓の曲打ちなどの趣向が加えられたと報告している「小寺 一九二九b・一六〇一七」。演者が芸能者を志向し、芸能の醍醐味だけが興味の中心になり、地域社会から遊離して「芸能の自立運動」の場になる傾向がある。近年は午後の本公演に、夜間の研究公演が加わって普段は見るべきでない演目が復活したり、秘儀とされてきた「神がかり」が公開されることも多くなってきた。確かに研究者にとっては貴重な機会かもしれないが、何のための公演か違和感を隠せない。民俗芸能の「舞台化」は論議と検討を進める時期に差し掛かっていると考える。

6、民俗藝術から民俗芸能へ

小寺融吉の大きな業績は「民俗藝術」の研究を推進したことである。一九二七年（昭和二）七月に「民俗藝術の會」が発足し、翌年の一九二八年一月には機関誌『民俗藝術』を刊行した。構成員は、柳田國男・折口信夫・中山太郎・高野辰之・早川孝太郎・小寺融吉・永田衡吉・金田一京助・西角井正慶・今和次郎・中山晋平・藤沢衛彦・野口雨

情・北野博美などであった。民俗学・言語学・考現学・音楽学・神道学・演劇学・作曲家・作詞家など多彩な顔ぶれであった。創刊号の巻頭論文には折口信夫の「翁の発生」が掲載された。機関誌は一九三二年（昭和七）まで続き、計四八号を刊行して廃刊となった。「民俗藝術の會」の結成に際して興味深い議論があった。中村吉蔵・永田衡吉・小寺融吉の三者が協議を重ねた。三人は共に郷土芸能を「藝術」とみる立場にあったのでこれは問題はなかった。しかし、藝術の上に何という言葉が被せるかについて、中村は「土俗」を、小寺は「民族」を主張した。当時の文脈から言うと、日本の人類学会では総称の *anthropology* を「体質人類学」を指すとして固定し、*ethnology* には「人種学」、*ethnography* には「土俗学」をあてていた。一九二八年に台湾の台北帝国大学に設置された「土俗・人種学教室」はこの用法に基づく。しかし、「人種学」と対応していた *ethnology* は「民族学」へと変わっていった。日本の学界で「民族学」の用語を初めて使ったのは岡正雄（一八九八〜一九八二）である。岡正雄は一九二五年に柳田國男と共に雑誌『民族』を創刊し、その創刊号にシュミットとコッパース、リヴァースなどの翻訳の一部を「民族学」の目的」として掲載した。これが日本における「民族学」の用語の初見ではないかとされている（金 二〇〇八・一一八）。

一九二九年には宇野圓空の大著『宗教民族学』（岡書院）が刊行されている。永田衡吉は次のように述べている。「その論戦を傍で見ていた劇作一方の私はシビレがきれてきた。突差に頭に浮かんだのは、さきごろ新聞の広告か何か

で見た『民俗学概論』という翻訳書の名である。民族の民と、土俗の俗をくつつけた民俗でもある、さしで口を出して、民俗藝術にしようじゃないか、と言うと、小寺は直ぐ、それはいいね、と賛成した。とど、中村も不承々々に賛成した。たわいもない誕生であった」〔永田 一九八二・一六五〕。この誕生秘話からわかるように「民俗」の内容を精査し議論したわけでもなく、シャロロット・バーンの『民俗学概論』（岡正雄訳。岡書院、一九三〇）の新聞広告にヒントを得ただけであった。小寺融吉が「民族」にこだわったといっても、当時定着していた「土俗」に対して、一九二五年に創刊されたばかりの雑誌『民族』の内容と名称に惹かれただけであろう。「民俗藝術」という名前の実態は、「郷土舞踊」に代わる新鮮なイメージとして作られたことになる。『民俗藝術』の巻頭言は柳田國男が匿名で執筆しているが、それでも明確な定義はない。小寺融吉は昭和時代の初期に演劇舞踊史が、能・歌舞伎・人形芝居などの個別的で専門的に研究が展開していった時に、それまでは不確定な領域とされていた民間の祭祀芸能、郷土舞踊などを、

「民俗藝術」として括ることで、新たな研究分野とした〔永田 一九八二・一七四〕。いわば外枠があつて、幾つかの分野に分けていく過程の中で民衆文化研究の新たなジャンルを切り開いたことになる。

「民俗藝術の会」発足後の研究の流れは、小寺融吉に代表される演劇学・美学系、折口信夫に代表される民俗学系に分かれた。三隅治雄は前者を早稲田派、後者を慶應・國學院系と呼んだ〔三隅 一九八九・一七〕。前者は所作や動きにこだわらる「芸態論」、後者は民間信仰を中核に据えて解釈する「意味論」といってもよい。これに対して、京都の林屋辰三郎に代表される芸能史研究がある。これは西田直次郎など文化史学派に端を発し、歴史学との接合を意図して、芸能研究を歴史学の補助学として利用する。歴史的背景を重視し、歴史史料に根拠を求めて研究する実証派で「環境論」とでもいべき立場である。現在でも基本的にこの三つの流れは維持されているが、文化財や文化遺産の概念が登場し民俗芸能の利用・活用・流用が盛んになると、「資源論」と呼ぶ新たな流れも登場してきた。

戦前には郷土舞踊や郷土芸能、民俗藝術や民間藝術など多様な言葉が使用されていたが、戦後には民俗芸能に定着した。本田安次の回顧では、戦後の一九四九年から一九五〇年頃に民俗芸能としての名称が確立したという記憶があ

るといふ。その普及にあたっては一九五九年に「全国民俗芸能大会」と改名したイベントが、続いていることの役割は大きい。

小寺融吉の民俗芸能研究は二人の弟子に受け継がれたと言える。一人は本田安次（一九〇六―二〇〇一）で、膨大な現地調査の記録化と地元の文献史料の翻刻でこの分野の研究は飛躍的に発展した。本田安次の業績としては、『陸前浜乃法印神楽』（私家版、一九三四）、『山伏神楽・番楽』（斎藤報恩会、一九四二）、『能及狂言考』（丸岡出版社、一九四三）、『霜月神楽之研究』（明善堂書店、一九五四）などが初期の仕事であるが、中核は「古風」や「美」を暗黙の前提とする芸態研究に基づき歴史的發展を考える方法をとった。もう一人の弟子は、歌舞伎研究を受け継いだ郡司正勝（一九一三―一九九八）で、美学を前面に押し出して『かぶき―様式と伝承―』（寧楽書房、一九五四）、『おどりの美学』（演劇出版社、一九五七）、『かぶきの美学』（演劇出版社、一九六三）などを著した。「早稲田派」とも呼ばれる学風を築いた二人は、共に折口民俗学を中核に独自の芸態研究を進展させた。本田安次の「神楽は鎮魂である」という言説はこの流れから出て来る。郡司正勝は折口学を換骨奪胎して歌舞伎の解釈に挑む独創的な業績を積み上げた。

7、民間学としての舞踊研究

日本常民文化研究所を創設した澁澤敬三をめぐる動きも小寺融吉の舞踊研究と次第に接合した。一九二二年（大正一〇）、澁澤敬三はアチックミューゼウムソサエティを結成して三田綱町を拠点として活動を開始する。当初は玩具の蒐集であったが、次第に民具に広がり、調査研究の一大事業に乗り出した。大きな転機は一九三〇年（昭和五）四月一三日に港区三田綱町の澁澤敬三邸で開催した花祭の公演である。奥三河の愛知県本郷町中在家（現在は東栄町）から演者を招いて、澁澤敬三邸の新築落成を記念しての「一力花」の奉納として行われた（『民俗学』昭和五年五月号に記事掲載）。この行事は同年四月に、早川孝太郎が七年をかけて作成した『花祭』（前篇・後篇）「早川 一九三〇」の出版のお祝いも兼ねていた。東京では初めての花祭の公演で、民俗学者は古代風の言い方で「新室はがひ」と呼んだ。当日の招待者は一〇〇人以上で、参加者の「芳名録」によれば、著名な人物として、柳田國男、伊波普猷、泉鏡花、石黒忠篤、新村出、宇野圓空、白鳥庫吉、石田幹之助、宮尾しげを、有賀喜左衛門、松本信廣、松平齊光、横山重、木内信胤、前田青邨、小林古径、金田一京助、幸田成友、穂積重遠、東畑精一、小野武夫、上原専祿、野上豊一郎、

石坂泰三などがいる⁽¹⁴⁾。小寺融吉もその一人であった。招待客には、歴史学・民俗学・民族学・農政学・言語学・宗教学・地理学・国文学・法学・経済学・社会学・芸能研究・日本画家・小説家・アイヌ研究などの分野で当時の第一線で活躍中の人々を集め、財界関係者も含まれて、澁澤の幅広い人脈を知ることが出来る。一四日には再度、花祭を再現してもらって一六ミリフィルムに収めた。奥三河の花祭の公演は大きな転換点になった〔鈴木 二〇一〇〕。

折口信夫は、この年には多くの見学や実演に関わった。

正月には奥三河の中在家と足込で花祭を見学し、同行者は折口信夫、今和次郎、早川孝太郎、宮本勢助、高橋文太郎などであった。同年三月に刊行された『民俗藝術』第三巻第三号は「花祭り特集」を組み、折口信夫は「山の霜月舞―花祭りの解説」を寄稿している。四月一四・一五日には國學院大學郷土研究会主催で足込の花祭の実演、四月二二日には「民俗藝術の会」・國學院大學郷土研究会共催の西浦^{うれ}の田楽（静岡県水窪町）実演で解説も引き受けた。更に、四月三〇日に長野県新野の雪祭の奉仕者が上京し、五月二日に日本青年館、五月三日には郷土研究会主催で國學院大學で新野の雪祭の実演を行った。五月四日には明治神宮で公開実演を行った。これらの催事の多くに「民俗藝術の会」が関わっていた。実演にあたっては一九二五年以来の

日本青年館での「郷土舞踊と民謡の會」の経験が生かされ、小寺融吉も協力を惜しまなかった。

六月には折口信夫の『古代研究』民俗学篇第二が大岡山書店から刊行された。折口信夫は一月には明治神宮鎮座十周年大祭の催事として日本青年館で行われた比山番楽（山形県遊佐町）を見学した。小寺融吉は編集にあたっていた『民俗藝術』の刊行が軌道にのり、花祭や雪祭の実演に関わることで、民間の舞踊の価値を実際に多くの人々に見てもらう機会を得たのである。

小寺融吉の郷土芸能や民俗藝術に関わる動きは、実は日本の大きな動きの一環であった。日本の一九一〇年代から一九三〇年代初めにかけての大正デモクラシー期には、学問の地殻変動を引き起こした個人的な「在野の学」が多く生まれた。鹿野政直はこの動きを「民間学」と呼び、国家や政府に奉仕する官学アカデミズムに異議申し立てを行い、一般の人々の学問への自発性を喚起して持続することで、既存の学問を新たに組み替えたと評価した〔鹿野 一九八三・七〕。「民間学」の大きな特徴は、「生活」を研究主題に浮上させて対象化したことで、担い手の「民衆」、生活を営む場の「地域」、生活の基調をなす「日常性」の復権をもたらし、生活様式としての文化の再発見に繋がった〔鹿野 一九八三・二〇一―二〇二〕。研究対象は普通の一般

の人々である。「民間学」生成の背景には、急速な近代化で激変する生活への不安感や焦燥感があり、生活文化の見直しが要請されたのであった。

「民間学」には、柳田國男の民俗学、伊波普猷の沖繩学、折口信夫の古代学、南方熊楠の生物学、柳宗悦の民芸論、金田一京助のアイヌ学、喜田貞吉の被差別部落研究、今和次郎の考現学、津田左右吉の歴史学、牧口常三郎の人生地理学、小野武夫の農村学、土田杏村の哲学、権田保之助の民衆娯楽研究、高群逸枝の女性史学、山本宣治の性科学、小倉金之助の数学、田村栄太郎の一揆や博徒研究、森本六爾の考古学など個性的な人々が推進者となった。澁澤敬三の常民文化研究は、まさしく「民間学」であり、しかも「民間学」相互を緩やかに結びつける結節点の役割を果たしていたと思われる。その象徴的な出来事が一九三〇年の澁澤邸での花祭り公演であった。小寺融吉の「民俗藝術の會」も花祭りを介してより広いネットワークに参与することになった。「民間学」は組織や制度には馴染まず、運動体として存続したと言える。

現在でも日本の各地を歩くと折口信夫や小寺融吉との出会いを語る住民の声を聞くことがある。山形県遊佐町に伝わる杉沢比山の番楽は一九三〇年に折口信夫が初めての東北旅行に出かけた時、八月一日に杉沢比山の「本舞」を

見学して大きな感動を受け、折口は直ちに小寺融吉と本田安次に報告、二人は八月二〇日の「神送り」を見学した。この縁で杉沢比山は、同年十一月四日に東京の日本青年館で開催された明治神宮鎮座十周年大祭において奉納公演を行う機会を得た。一月六日には、東京靖國神社能楽堂で、「民俗藝術の會」が主催し、杉沢比山の単独公演で全曲の実演が行われた。これが杉沢比山が全国に知られる契機となり、後に国の重要無形民俗文化財の登録に至る道筋が開けた。

瀬戸内海に浮かぶ白石島（岡山県笠岡市）の盆踊は「白石踊」の名称で国の重要無形民俗文化財に登録されている。白石島の盆踊は、一九二八年八月に山陽新報社主催の山陽盆踊大会に参加して、初めて島外での上演を行い、審査員から好評をもって迎えられた。一九二〇年代後半から一九三〇年代にかけて日本各地で盆踊大会が開催され、岡山でもその一環として行われたと思われる。競演大会はそれまでと異なる見方を獲得する機会となった。一九三〇年には白石島は日本青年館が主催した第五回「郷土舞踊と民謡の會」に参加したが、その時の名称は「船唄と盆をどり」であった。これをきっかけに全国的に知られるようになり、一九三四年に『山陽新報』の記事に「白石踊」の名称が現われる〔木原 二〇一五・二〇一九・一一〕。小寺融吉は白石

島の踊りを他の地域と比較して「見ても踊っても面白い」と高く評価し「小寺 一九三三」、島人に自信を与えた。これは「郷土舞踊と民謡の會」に参加した団体に関する合評である。かくして価値付けと評価が外部から加わった。ここには島の踊りが徐々に「国民文化」に組み込まれていく過程を見ることが出来る。白石島は一九三四年には日本最初の国立公園の中に組み入れられ、一九四三年には名勝指定を受ける。郷土舞踊に合わせて、日常の風景が資源化され観光化に至る動きが既に戦前であった。「郷土舞踊と民謡の會」は地元の人々が外部の人々と出会い交流する機会となつていたのである。

民間学は地域社会との相互作用の展開の中で思いもよらない方向に転換することになった。学問の対象として生活の中で育まれてきた祭祀芸能が研究対象とされると、あるまなざしを研究者も地元も獲得することになる。まなざしの交錯、混淆、反発など様々な作用がその中から生成される。特に民俗芸能は「見る」「見られる」「見せる」という関係性を顕著な形で創り出す。観客のまなざしで芸能は変化する。小寺融吉が採用した「民俗芸能の舞台化」は、元来は祭りの日に特定の場で行われていた祭祀芸能を、時空間の文脈を越えて民俗芸能として切り取り、別の文脈に埋め込む行為にほかならない。これは近代の特徴である「再

文脈化」の典型である。小寺融吉はこの試みの初期の意図的な実践者であり、功罪に気づき自省の念に駆られながら、身をもつて近代を体験してきた研究者であつたと言えよう。

〔参考〕小寺融吉主要著作

『近代舞踊史論』日本評論社出版部、一九二二（国書刊行会、一九七四）

『児童劇の創作と演出』弘文社、一九二八

『舞踊の美学的研究』春陽堂、一九二八（国書刊行会、一九七四）

『藝術としての神楽の研究』民俗藝術叢書、地平社書房、一九二九

九

『をどり通』通叢書、四六書院、一九三〇

『日本近世舞踊史』東洋藝術講座、雄山閣、一九三一（国書刊行会、一九七四）

『をどりの型』卷一・二、小田原書房、一九三三―三四

『をどり名曲解説第一冊』壬生書院、一九三五

『日本民謡辞典』壬生書院、一九三五（名著刊行会、一九七二）

『郷土舞踊と盆踊』桃蹊書房、一九四一

『郷土民謡舞踊辞典』富山房、一九四一（名著刊行会、一九七四）

『日本の舞踊』創元社、一九四一

『舞踊の歩み』ジープ社、一九五〇

『おどりの型と評論』国書刊行会、一九七五

『郷土舞踊』国書刊行会、一九七五

『民族舞踊研究』国書刊行会、一九七五

〔参考文献〕

- 板谷 徹 一九七八「日本における舞踊研究の足跡―日本舞踊史を中心に―」『舞踊学』創刊号、舞踊学会、一〇〇―三頁。
- 板谷 徹 一九八九「小寺融吉の舞踊研究」『芸能』第三二巻第一〇号、芸能発行所、一七―一九頁。
- 牛島史彦 一九九二「江戸の旅と流行仏―お竹大日と出羽三山―」板橋区郷土資料館。
- 江川久子 二〇〇六「新しい舞踊の技巧と心持を表わす動作―小寺融吉の身体論―」『演劇研究センター紀要』Ⅶ、早稲田大学二一世紀COEプログラム（演劇の総合的研究と演劇学の確立）、一三三―一四二頁。
- 鹿野政直 一九八三『近代日本の民間学』岩波書店（岩波新書）。
- 木原弘恵 二〇一五「文化財指定と『担い手』の実践―二つの踊りの来歴をめぐって―」『関西大学社会学部紀要』第一二二号、一〇七―一一六頁。
- 金 京秀 二〇〇八『宗教人類学』と『宗教民族学』の成立過程―赤松智城の学史的意義についての比較検討―『季刊 日本思想史』七二号、ぺりかん社、一〇七―一二九頁。
- 熊谷辰治郎 一九二九「郷土舞踊と民謡の會」の回顧―東京四月の年中行事―『民俗藝術』一卷四号、四一―四六頁。
- 熊谷辰治郎 一九七九「日本青年館と民俗芸能運動」『民俗芸能』第五九号、七三―七七頁。
- 小寺廉吉 一九二八「奥能登の『田の神行事』」（一、二）『ひだり』六年一号、一四―一七頁。六年二号、二一―二六頁。
- 小寺廉吉 一九四〇「間引きの実行とその道德感」『民間伝承』五巻五号。
- 小寺廉吉 一九六二「灯台だった柳田先生」『近畿民俗』三二号（後藤絵一郎編『柳田国男研究資料集成』第七巻、日本図書センター、一九六七に再録）
- 小寺廉吉 一九六三「庄川峡の變貌―越中五ヶ山の今と昔―」ミネルヴァ書房。
- 小寺廉吉 一九七三「柳田先生の思い出」『民間伝承』第三七巻一号、一〇―一二頁。
- 小寺廉吉 一九八六「山村民とその居住地「ふるさと」の問題」かとう印刷社。
- 小寺融吉 一九二二『近代舞踊史論』日本評論社出版部（国書刊行会、一九七四再刊）。
- 小寺融吉 一九二九 a「藝術としての神楽の研究」（民俗藝術叢書）地平社書房。
- 小寺融吉 一九二九 b「郷土舞踊と民謡の會に就て」『民俗藝術』第二巻第七号、一二―二五頁。
- 小寺融吉 一九三三「郷土舞踊の會の回答」『旅と伝説』六六号。
- 小寺融吉 一九四一『郷土舞踊と盆踊』桃蹊書房。
- 後藤 齊 二〇一三「世界人マラン」『エスペラント』(La Revuo Orienta) 第八〇巻七号。
- 武田俊輔 二〇〇一「民謡の歴史社会学―ローカルなアイデンティティ/ナショナルな想像力―」『ソシオロギス』二五号、一―二〇頁。
- 笹原亮二 一九九二「芸能を巡るもう一つの『近代』―郷土舞踊と民謡の會の時代―」『芸能史研究』一一九号、四七―六三頁。

笹原亮二 一九九三「民俗芸能大会というもの―演じる人々・観

る人々―」民俗芸能研究会／第一民俗芸能学会編『課題としての民俗芸能研究』ひつじ書房、三九五―四二二頁。

白幡洋三郎 一九九六『旅行ノススメ』中央公論新社。

鈴木正宗 二〇一〇『澁澤民間学』の生成―澁澤敬三と奥三河―』『国際常民文化研究機構年報』一号、一七〇―一八一頁。

永田衛吉 一九八二『民俗芸能・明治大正昭和』錦正社。

成田龍一 一九九八『故郷』という物語―都市空間の歴史学―』

吉川弘文館。

橋本裕之 二〇〇六『民俗芸能研究という神話』森話社。

早川孝太郎 一九三〇『花祭』（前篇・後篇）岡書院（『早川孝太郎全集』第一巻・第二巻、未来社、一九七二、一九七二

に再録）。

三隅治雄 一九八九『民俗芸能と芸能研究』『芸能』第三二巻第

四号、芸能発行所、一二―二〇頁。

室井康成 二〇〇六『構築される「郷土」―観―柳田国男における

概念化の意義をめぐって―』『総研大文化科学研究』二号、九三―一四頁（後に『柳田国男の民俗学構想』森話社、二〇一〇に再録）。

渡辺 保 一九九七『黙阿弥の明治維新』新潮社（岩波現代文庫、

二〇一〇で再刊）

アンダーソン、ベネディクト 一九八七『想像の共同体―ナショ

ナリズムの起源と流行―』（白石隆、白石さや訳）リポロポート（増補版はNIT出版、一九九七年。定本は書籍工房早山、二〇〇七年）

註

(1)

民俗芸能研究の生成と展開に關しての批判的考察は、『橋本 二〇〇六』が詳しい。本稿もこれに負うことが大きい。

(2)

一九〇八年九月に小樽に生まれる。幼少期に年の離れた姉のとしと中村税（小松製作所初代社長）夫妻の養子となり東京に転居した。東京開成中学校（現・開成高等学校）を卒業後、一九二六年に同級生の川尻東次と共に人形劇を公演し、これを契機に一九二九年には人形劇団ブークを創立し、現代人形劇の発展につながった。ブークはエスペラント語のラ・ブラ・クルボの略称である。文学座の中核メンバーとなり、岸田國士、久保田万太郎、三島由紀夫など、座付きの劇作家の戯曲に出演して翻訳劇もこなした。特に三島の戯曲の美しさに心酔した。不条理劇などの前衛劇にも挑戦し、一九七二年より一年間、イヨネスコ作の『授業』を毎週金曜日夜に渋谷の小劇場ジャン・ジャンで上演して伝説となった。一九七〇年代中頃からは別役実作品の常連となる。一九七三年、文化庁芸術祭大賞受賞、一九七六年、紫綬褒章受賞、一九八七年、文化庁芸術祭受賞。一九九一年に死去。一九三六年四月六日に出席した記録が残る。柳田國男に關しては「小寺廉吉 一九六二、小寺廉吉 一九七三」に記事がある。柳田國男はエスペラントに興味を持っており、小寺廉吉とはその関係もあった。小寺廉吉は一九二六―一九二八年にフランスを中心に在外研究をした時に、一九二六年の第一八回世界エスペラント大会（エジ

ンバラ)に出席して、ベルギー人の民族誌家ガスバール・マラン(一八八三—一九六九)に出会って、トルストイ主義のアナキズムの実践地のホワイトウエイ・コロニーを訪問した。小寺廉吉は少年期に大杉栄からエスペラントとアナキズムの薫陶を受けていた。マランは一九二八年から一九三八年にかけ世界旅行に出て、日本には一九三五年八月から一九三六年六月まで滞在した。この時に、小寺廉吉の紹介で、エスペラントに興味を持っていた柳田國男とも会ったと思われる。マランは沖繩の民俗研究の先駆者の比嘉春潮に紹介された。全てがエスペラントの繋がりで民俗学との接点もここにあった。「後藤二〇一二」。小寺廉吉を巡る海外との交流には当時の知識人の間に流行したエスペラントへの関心があり、演劇人中村にも影響を与えた可能性があり、人形劇団ブークの命名に繋がったのではないかと思われる。

(4) 主著は越中五箇山の変容を描いた地誌で「小寺廉吉 一九六三。小寺廉吉 一九六八」、『日本民俗学大系』第五卷(生業と民俗)平凡社、一九五九年にも山村について執筆している。

(5) 主な作品は以下に収録されている。「安寿姫と厨子王丸(脚本六種)」「早稲田文学』第一九一号(一九二二年)、『史劇葛城の岩橋』『早稲田文学』第二二八号(一九二四年)、「久米の仙人(一幕物三種)」「早稲田文学』第二三七号(一九二五年)、「真間の手古奈」「現代戯曲全集第十五卷」(国民図書、一九二五年)、「人の世の嘆き」「久米の仙人」「日本戯曲全集現代篇第五輯(第三七卷)」(春陽堂、一九二八年)、「誘惑(一幕)」「演劇研究』第

一卷第一号(一九二五年)、「アバタの勝利」『演劇研究』第二巻第七号(一九二六年)。

(6) 小寺融吉の記述は直観的である。「神楽は、神に見せるもの、と解釈するのは近世の附会。本義は、神が現われたものだったのだ。右手に持つ鈴は楽器ではなく、神の声。太鼓も同じ。しかし笛はあきらかに、楽器にすぎない。神楽は、古事記や書紀よりもっと古かったのである。したがって、もしもそこに記紀のキャラが出てくるようだったら、それは比較的新しい創作にすぎず、古態を伝えたものではない。：歌舞伎で『手をひらいて出す』動作。これも神楽から在る古い様式なのだ」。記述は示唆に富むが実証的とは言い難い。

(7) 『郷土舞踊と盆踊』の評価はこれから深めていく必要がある。小寺融吉は盆踊を総合的に研究し、徹底した機能主義によって芸能の存続のあり方に大きな示唆を投げかけている。

(8) 田澤義鋪が郡長時代に指導した静岡県安倍郡有度村の青年団員五〇人を呼んで奉仕させると、一〇日間で人夫の数倍の能率をあげた。政府は田澤に許可を与え、申し出に応じて全国各地から一団体、五〇から六〇名程度の青年が上京し、毛布と米を各自持参して一〇日間の労力奉仕をした。朝夕はバラックの宿舎で講義と懇談会がもたれ、政治教育の場でもあった。既に政府は一九一五年の第一次訓令(「青年団体ノ教導発達ニ関スル件」)で青年団を公民教育のための修養団体として位置づけ、田澤義鋪の始めた明治神宮造営奉仕団(一九二〇—一九二〇)はその実績造りとなった。

(9) 全国一万一五六六の青年団は、建設資金を拠出することを申し出たという。

(10) 財団法人日本青年館の事務局長の横山祐吉は、後に日本ユースホステル協会を設立し、日本青年館は日本のユースホステル1号になった。

(11) 各地の青年団は建設資金のため、植林、土木、農業労働、映画、芝居、相撲の開催、節酒、節煙によって青年団員一人一円の資金を集め、募金額の合計は約二〇〇万円に達した。政府や財界の寄付を受けることなく事業を完成させたという。

(12) 民謡という用語の普及は大正年間(一九二一～一九二二)である。大きな転機は一九一四年に文部省文芸委員会が全国から集めた郷土の歌を『俚謡集』として刊行したことで、その後俚謡の名称がついたレコードが販売され普及した。しかし、大正年間に「民謡」の語が普及し、一九二二年には宮城県出身の後藤桃水などが大日本民謡研究会を組織した。北原白秋、野口雨情、中山晋平、藤井清水などの詩人や音楽家は新民謡運動を興し、民謡は従来の俚謡や俗謡だけでなく、芸人が手を入れた洗練された地方歌や、俚謡の形式と気分を生かした創作歌謡も含む広い概念になった。

(13) 館野太朗は芸能文化研究会第一回研究会(二〇一五年五月二四日)の発表「ページェント」から「郷土舞踊と民謡の會」へ「大正時代の小寺融吉」で、「郷土舞踊と民謡の會」に関して、「ページェント」と「郷土舞踊と民謡」の二案が検討されていたが、小寺融吉の提案で後者が採用されたことを論じた。坪内逍遙が導入した

西欧演劇のページェント論をどのように日本の祭礼や芸能の理解に役立てて再構築したかに関して議論が深まることを期待したい。

<http://geinobunka.blogspot.jp/2015/03/blog-post.html> 最終アクセス。二〇一五年八月三十一日。

(14) 当日の参加者の芳名録一覧は、「鈴木 二〇一〇…一八一～一八二二」に掲載した。

(慶應義塾大学名誉教授)